

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 17 日現在

機関番号：34417

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25510019

研究課題名(和文) 世代間交流に基づく「認知症ケアリング教育」のためのプログラムと教材の開発

研究課題名(英文) Material and Program Development for Dementia Understanding Education Based on Intergenerational Exchange

研究代表者

菅谷 泰行 (SUGATANI, Yasuyuki)

関西医科大学・医学部・准教授

研究者番号：00206393

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本課題は次の3つの調査研究を実施した。1)日本の老人福祉施設に於ける世代間交流の実施状況と日独に於ける世代間交流に基づく認知症ケアリング教育(=認知症理解教育)の現状を調査した。2)ドイツのアルンスベルク市並びにドイツアルツハイマー協会と共同で、認知症ケアリング教育と世代間交流に関する日独シンポジウムをドイツのアルンスベルク市に於いて開催した。3)音楽と絵本を媒体とする認知症高齢者と幼児のための世代間交流セッションを継続的に実施し、その結果を基にして効果的な世代間交流を可能とするプログラムと教材の開発を行った。

研究成果の概要(英文)：This Study examines the following three objectives: 1) Survey on the implementation status of intergenerational exchange in care facilities for elderly in Japan and research of dementia understanding education projects based on intergenerational exchange in Japan and Germany; 2) Holding of a Japanese-German symposium for dementia understanding education and intergenerational exchange in collaboration with the German city of Arnsberg and the Alzheimer's Association of Germany; 3) Running intergenerational activity sessions using picture books and music therapy for nursery school children and elderly people with dementia and material and program development for dementia understanding education according to the result analysis of these sessions.

研究分野：老年言語学

キーワード：世代間交流 認知症 認知症理解教育 ケアリング 高齢者 子ども

1. 研究開始当初の背景

我が国の認知症者の人数は 2012 年の時点で 462 万人と推計されている。今後、所謂「2025 年問題」を含め、超高齢化の進行とともに、認知症者は急増すると予測されている。この点で、所謂「認知症問題」は、日本はもとより、国際社会が一致協力して解決しなければならない火急の要件の一つであると言える。

ところで、イギリスの認知症国家戦略がそうであるように、認知症問題の解決に向けて最初に取り組みなければならない課題が国民全体の「意識と理解の向上」である。国際アルツハイマー病協会が 2012 年に刊行した報告書は「認知症に関するスティグマの克服」を大きなテーマとしているが、認知症者やその家族にやさしい地域と国家をつくり上げるためには、認知症に対する偏見を取り除き、認知症についての正しい知識を社会に根付かせることが求められるのである。

2. 研究の目的

上述の点で、認知症の啓発活動は重要である。わが国ではすでに全国キャラバン・メイト連絡協議会が偏見の除去を目的にして、地域住民のための認知症サポーター養成講座を開講し、平成 27 年 12 月末の時点で 700 万人を超えるサポーターが誕生している。また福岡県大牟田市のように早くから認知症の啓発活動に積極的に取り組み、成果を上げている市町村もある。

本研究課題はこのような我が国に於ける認知症教育に関わる既存の社会資源の活用と更なる発展のために、「認知症ケアリング教育」(＝認知症理解教育)を構想し、その実現のために、次の 3 つの目的を設定し、研究調査に従事した。

- (1) 世代間交流に基づく子どもへの認知症教育の現状調査を日本と海外を対象に実施し、世代間交流と認知症に関わる教育の現状を明らかにする。
- (2) 世代間交流に基づく認知症教育に関するシンポジウムを開催し、世代間交流と認知症教育のためのネットワークの構築に向けた基盤作りを行う。
- (3) 世代間交流に基づく認知症理解教育のためのプログラムと教材の開発を行う。

3. 研究の方法

上記 (1) に関しては、①国内での質問紙調査と、②文献調査に基づく海外でのフィールドワークを行った。次に (2) に関しては、ドイツに於いて国際シンポジウムを主催した。最後に (3) に関しては、実践研究的手法を採用し、認知症高齢者と保育園児による世代間交流セッションを継続して実施し、その分析結果を基に高齢者介護施設で効果的に実行可能な世代間交流プログラムと教材の開発を行った。

4. 研究成果

(1) ①の国内質問紙調査は、2013 年の 7 月と 8 月に大阪府社会福祉協議会と近畿老人福祉施設協議会の協力を得て、この 2 団体に所属する近畿 2 府 4 県の会員施設すべてを対象に実施した。送付数、回答数、回収率は下表の通りである。

表1 質問紙の送付数、回答数、回収率

府県名	送付数	回答数	回収率 (%)
大阪	553	139	25.1
京都	237	79	33.3
奈良	129	43	33.3
兵庫	259	65	25.1
滋賀	75	32	42.7
和歌山	84	27	32.1
近畿全体	1337	385	28.8

この質問紙調査を通して、世代間交流の現状に関して、幾つかの重要事項が明らかになった。ここでは交流の実施状況、交流開始年、交流の頻度を取り上げ、説明を加えたい。

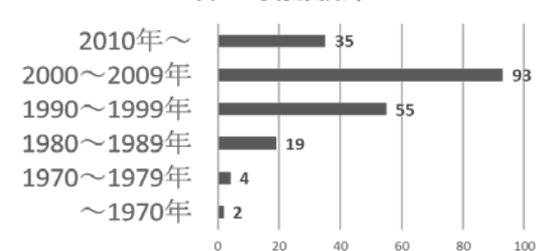
表2 交流の実施状況

n=385		
	交流あり	交流なし
近畿全体	281	104
		実施率 (%)
		73.0

表 2 は交流の実施状況を示す。実に 7 割を超える老人福祉施設が利用者と子どもの世代間交流を実施している。ただ回答を寄せた施設が世代間交流に積極的な法人に偏っていた可能性もある。この点で、仮に送付した全施設数で除算すると、20%が実施率となる。先述のように、本調査は近畿圏の社協等に加盟する全会員施設を対象とする。したがって、この結果から、少なくとも統計的には近畿圏の老人福祉施設の 2 割が世代間交流を実施しているとする推計が成り立つ。

次に交流開始年については、表 3 の結果となった。

表3 交流開始年



この表 3 が示すように、時代が進むにしたがって、交流を始める施設が飛躍的に増えている。例えば 70 年代の回答施設数を基準値にして、その後の増加の割合を算出すると、80 年代が 375%、90 年代が 1275%、2000 年代が 2225%となり、とりわけ 90 年代からの増加が著しい。このように特に 90 年代からの増加率が高いのは「21 世紀福祉ビジョン」や 97 年の中教審答申など、国の行政指針が大きく影響していると推察される。

最後に交流の頻度についての集計結果を表 4 に示す。

表4 交流の頻度 n=274

頻度	併設あり (%)	併設なし (%)	全体 (%)
1回以上3回未満	15 (26.8)	111 (50.9)	126 (46.0)
3回以上5回未満	11 (19.7)	54 (24.8)	65 (23.7)
5回以上7回未満	5 (8.9)	17 (7.8)	22 (8.1)
7回以上10回未満	7 (12.5)	10 (4.6)	17 (6.2)
10回以上15回未満	11 (19.6)	17 (7.8)	28 (10.2)
15回以上	7 (12.5)	9 (4.1)	16 (5.8)

上表は無記入を除く 274 施設の結果を年単位の度数表で表したものである。先ず全体では年 1~3 回の交流頻度が 46.0%に達し、回数の少なさが際立っている。次に「併設あり」と「併設なし」の表記は、保育所などの併設の有無を表すが、交流の頻度に於いて、両者に顕著な差が見られることがわかる。全体的には、従前から指摘がされているように、年中行事などのイベントとして世代間交流を実施する施設が多く、今後、交流の質的改善を図り、行事的な世代間交流の在り方を克服していく必要があることが確認された。

次に②に関しては、2013 年 4 月~2014 年 9 月に、ドイツの世代間交流と認知症教育に関連するプロジェクトの現状について調査を実施した。先ず文献調査を行い、その結果から参考価値の高い 21 のプロジェクトを選び出し、2013 年 5 月と 2014 年 1 月に現地調査を行った。

この現地調査等を通して、ドイツの世代間交流に基づく認知症教育はアルツハイマー協会や認知症サービスセンター等の団体が運営する事業と、自主的な市民活動の 2 つに分かれること、また日本の「認知症サポーターキャラバン」のように、中央官庁などの行政組織が実質的な事業主としてプロジェクトの運営に関与することが少なく、むしろ市町村などの地域の行政区画内で民間団体などが中心となって、子どもへの認知症教育や世代間交流に携わっていることなどが明らかになった。

次に各プロジェクトが扱う子どもの年齢については、ミュンスターランド地区の認知症サービスセンターが開発した kiDzeln のように、就学前の幼児に焦点を当てて、子どもの社会的能力の育成に力を注いでいる活動から、7 歳から 22 歳の青年層までを対象とするアルンスベルク市の交流事業まで幅が広いこと、また日本と同様に、ドイツでも世代間交流コーディネータの養成、活動団体のネットワークの構築と情報の共有、活動成果の実証的評価法の確立等が重要課題として認識されていることなどが確認された。

(2) 2014 年 9 月 25 日に、日独シンポジウム “Deutsch-japanisches Symposium 2014: Demenz und generationsübergreifende Solidarität” をドイツのノルトライン・ヴ

ェストファーレン州のアルンスベルク市とベルリンに本部を置くドイツアルツハイマー協会と共同して、同アルンスベルク市に於いて開催した。シンポジウム参加者の決定に際しては、前述②の調査を基にして、特に優れた取り組みと評価されるプロジェクトを優先的に選んだ。以下にシンポジウムに協力頂いた認知症教育に係わる日独のプロジェクト名とこのプロジェクトを運営する組織名を一覧表示する。

- Stadt des langen Lebens-Stadt für alle Generationen (Fachstelle Zukunft Alter der Stadt Arnsberg)
- Generationen übergreifende Solidarität mit Menschen mit Demenz im Spannungsfeld zwischen Wissenschaft und Praxis (Alzheimer Gesellschaften NRW)
- Unter 7 Über 70 (Europäisches Institut für Musik und Generationen)
- kiDzeln (Demenz-Service-Zentrum-Region Münsterland)
- MusiKon (Alzheimer Gesellschaft im Kreis Soest e.V.)
- Bilder vom Alter in der Kinder- und Jugendliteratur (Kita Entenhausen Arnsberg)
- Kinder zaubern Lachfalten (Jugendbegegnungszentrum Liebfrauen Arnsberg)
- Apfelsinen in Omas Kleiderschrank (Alexianer Münster)
- Stell Dir vor, Oma hat... (Kultur Werk Stadt Netphen)
- Besuch im Anderland (Besuch im Anderland e.V. Stuttgart)
- Kompetenz Netz Demenz (SIC-Gesellschaft für Forschung, Beratung, Organisationsentwicklung und Sozialmanagement Augsburg)
- Demenz-Praxishandbuch für den Demenz (Deutsche Alzheimer Gesellschaft e. V. Berlin)
- 富山型デイサービス (NPO 法人このゆびと一まれ)
- 幼老型複合施設での世代間交流 (社会福祉法人江東園)
- 児童への認知症絵本教室 (福岡県大牟田市)

最後に、この日独シンポジウムに関する全資料はアルンスベルク市ホームページに於いてデータ化され、下記の URL から入手できるようになっている。

http://www.arnsberg.de/zukunft-alter/projekte/Deutsch-Japanisches_Symposium.php

(3) については、大阪府八尾市に所在する社

会福祉法人八尾隣保館、大阪府枚方市に本部を置く社会福祉法人聖徳園、大阪府堺市の社会福祉法人よしみ会泉北園に協力頂き、認知症高齢者と保育園児を対象とする世代間交流セッションを実施し、その結果を基礎にして、プログラムと教材の開発を進めた。

そもそも認知症ケアリング教育は大きく3つの特徴をもつ。1つは幼児から高校生までを対象とし、連続性のある教育体制を構築すること、次に情操教育や福祉教育を視座にして、認知症についての知識や対人スキルのほか、高齢者へのファミリーリティの増進、向社会的感情やQOLの向上に寄与するプログラムを作成すること、最後に高齢者との交流を通して、経験の蓄積と変容を可能とする教育内容に作り上げることである。

本研究はこのような「認知症ケアリング教育」の着想に基づき、その研究の第一段階として、就学前幼児教育に於ける認知症教育のあるべき姿を模索しながら、プログラム開発と教材作りに取り組んだ。

さて、プログラム開発のための交流は2014年5月～同年8月、2014年10月～2015年1月、2015年8月～12月の3期間に分けて実施した。交流のためのツールについては、絵本と音楽を選び、約45分間のセッションを週1回のペースで実行した。

次に交流の効果を調べるために、高齢者については、交流前後に認知機能面の評価スケールであるMMSEと前頭葉機能検査のFAB、高齢者用多元観察尺度であるMOSESの3つを用いて測定し、得点の事前値と事後値の差をウィルコクソン符号付順位検定で分析した。

園児の評価については、ドイツで開発されたKiddy KINDLの日本語版である「幼児版QOL尺度」と「幼児版QOL尺度(親用)」を用いた。全員の得点をパーセントイル値に変換後、高齢者の場合と同じく、ウィルコクソン符号付順位検定で、交流前後の差を調べた。また園児についてはグループインタビュー調査を加え、交流による心的変化を考察するための聞き取りを行った。

次にこの交流の結果を述べる。先ず高齢者では、評価尺度として用いたMMSE、FAB、MOSESのいずれにおいても、交流前後の得点に大きな変化は見られず、全体として統計的な有意差は認められなかった。

これに対して、幼児では有意な成果が確認された。ここでは2014年10月～2015年1月に絵本を用いて実施した世代間交流の結果を取り上げて、説明したい。

表5 絵本交流における「幼児版QOL尺度(親用)」の各下位尺度の結果

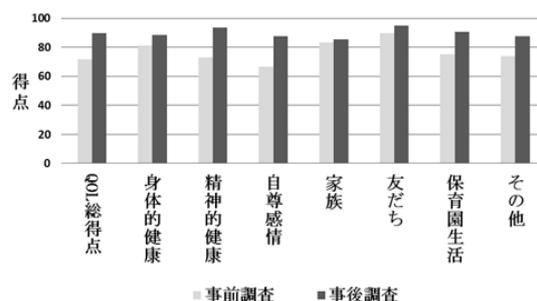
下位尺度	事前調査	SD	事後調査	SD	P値(両側)
身体的健康	83.70	11.7	88.04	11.8	0.161
精神的健康	83.97	13.30	95.38	5.72	0.003**
自尊感情	75.00	16.6	86.86	9.29	0.003**
家族	85.87	13.22	86.68	7.84	0.882
友だち	93.75	9.04	97.01	6.76	0.104
保育園生活	85.60	13.78	92.66	5.85	0.019*
その他	80.48	10.2	88.14	5.71	0.0003**

有意水準 ** $p < 0.01$ * $p < 0.05$

この表5は3ヶ月間の世代間交流の事前と事後の変化を「幼児版QOL尺度(親用)」を用いて調べた分析結果である。表5が示すように、「その他」を含む7領域すべてで事後値が事前値を上回り、「保育園生活」は有意水準5%で、また「精神的健康」「自尊感情」「その他」の3領域は有意水準1%で、有意差が確認された。

更に表6を示しておこう。これはQOLに関する事前調査で得点が低かった園児6名(=「気にかけてかかわる」ことが推奨される幼児)を抽出し、交流後の変化を調べた結果である。

表6 「気にかけてかかわる」ことが推奨される幼児のQOLの変化(絵本交流)



上表が示すように、やはり「幼児版QOL尺度(親用)」を構成する7領域すべてで交流後の数値が交流前の数値を上回っている。その中でも特に「精神的健康」「保育園生活」「その他」の3領域の伸び幅が大きく、「精神的健康」が72.92(SD 18.40)から93.75(SD 7.91)へ、「保育園生活」が75.00(SD 15.81)から90.63(SD 5.23)へ、「その他」が73.86(SD 16.45)から87.50(SD 8.35)へ上昇している。次にこれらの数値について、P値(両側)を求めたところ、「精神的健康」は0.062、「保育園生活」は0.093、「その他」は0.093で、いずれの領域においても、有意水準10%で有意な傾向が示唆された。最後に「自尊感情」については、事前値が66.67(SD 22.57)であるのに対して、事後値は87.50(SD 9.68)で、「精神的健康」と並んで、交流後の点数の伸びが最も大きかった。またP値(両側)は0.031で、有意水準5%で交流前後の変化に有意な差が確認された。

これらの結果から次の結論が導き出せるように思われる。先ず高齢者では有意な検定結果は出なかった。ただここでの記述は省いたが、事前調査でMMSEの得点が13ポイント以

上の高齢者では、MMSE、MOSES とともにセッション終了後に比較的大きな得点の上昇が認められており、今後、介入群の選定や介入の頻度を増やすことで、有意な結果を導く可能性があると考えている。

次に園児では、全体にQOLの改善が確認された。とりわけ、自尊感情や精神的健康に於ける得点の上昇が著しく、世代間交流が園児の内面に及ぼす効果が強く示唆される。自尊感情に関する国際比較研究では、日本の子どものQOLや自尊感情の低さが指摘されている。しかし、これまでの自尊感情に関する研究では認知症高齢者との世代間交流を媒体にした実践例はないように思われる。また世代間交流の先行研究に於いても、認知症高齢者との交流が子どもの自尊感情に及ぼす作用に言及した事例はないように思われる。この点で、今回の結果は子どもの自尊感情研究と世代間交流研究の関係を見直し、新たな研究領域を切り開く可能性を持つものであると考えている。

最後にプログラムと教材について述べる。上述のように、2014年5月から2015年12月まで、3段階に分けて交流を実施し、この交流のためのプログラムと教材の制作を続けた。既述のように、交流の媒体としては音楽と絵本を用いた。音楽による交流と絵本による交流は別々に実施し、双方の長短所を比較しながら、プログラムと教材の改良を行った。セッションそれ自体の完成度については、音楽を用いた交流が一体感やクオリティの高さで優っていた。しかし、検査スケールを用いた統計的な評価は、絵本を用いた交流がより良い結果となった。ここではこの絵本交流のプログラムと教材を取り上げ、詳述する。絵本交流は園児の入場行進で開始した。入場後、手足を動かしながら、オープニングソングを合唱し、挨拶と自己紹介を高齢者と園児の双方が交わした。その後、プログラムの中心部を成す絵本の読み聞かせ、お絵かきなどのワーク、絵本の音読の3つを連続して行い、手遊び・体操を経て、エンディングソングの合唱で終了した。歌唱後は開始時と同じく、園児は一列になって退場した。

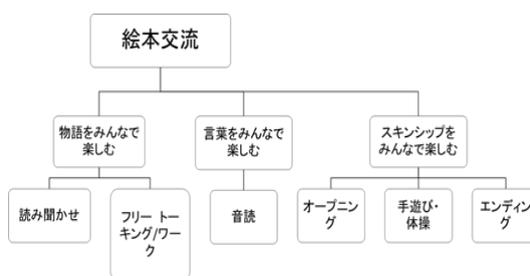
絵本交流では毎回のテーマを決めた。選んだテーマは、「運動会」「遠足」「お祭り」「くだもの」「やさしい」「むかしばなし」「おもいで」「家族」「クリスマス」「お正月」などである。施設に暮らす高齢者が季節の移ろいを感じられること、園児が理解できること、人と人のつながりの大切さや家族の温かさが伝わることを基準にして、テーマを選定した。絵本交流においては、上記の「読み聞かせ」「ワーク」「音読」の3部門が内容的にも時間配分の上でも、プログラムの中核部を形成する。セッションでは毎回のテーマに基づき、これら3部門が相互に関連し繋がりが持てるようにプログラムを組み立て、使用する絵本やワークの素材を選んだ。

次に音楽交流もそうであるが、スキンシップ

を重視し、入退場時や挨拶時の握手やハイタッチ、手遊びの活用などを一貫して実行した。プログラムの中にワークを加えたのも、ワークによる共同作業が高齢者と園児の関係づくりに役立つと考えたからである。ワークでは作業の結果よりも作業のプロセスを大切にし、高齢者と園児が描画やクリスマスなどの作品作りを協力して行うことで、お互いの親密さ（ファミリーティ）が深まることを目指した。なお、ワーク時には園児にクレヨンの受け渡しなどを担当させ、責任感や自己効力感などが育まれるように配慮した。

音読は高齢者の能動性を引き出す目的でプログラムに組み入れた。音読については、学習療法的手段として認知症高齢者に有効であることが報告されており、日常的に会話量の少ない施設暮らしの高齢者に発語の機会を提供し、活動性を高める手法として効果的であると考えた。

絵本の読み聞かせを成功させる上で、選書は重要な意味を持つ。今回の取り組みでは、絵本がもつストーリー性や美術的魅力はもとより、一方で感覚器の衰えを持つ高齢者を対象とすることから、活字の大きさ、文字の見やすさ・読みやすさなどのハード面に留意し、使用する絵本を決めた。また絵本は省略化された言語表現、多用されるオノマトペ、語句や構図の反復などの特徴をもつ芸術ジャンルであるが、音読に際しては、このような特色を活かした絵本を積極的に活用し、声に表情をつけながら、全員で大きな声で読むことを繰り返した。最後に絵本交流プログラムを構成する要素間の関係を階層的な組織図で表すと、以下ようになる。



次に絵本による世代間交流のために制作・開発した教材には、フェルト生地による野菜人形、同じくフェルト生地による果物人形、音読用の大型ことわざボード、同じく大型早口言葉ボード、音読と手遊び・体操を組み合わせた音読体操、ワーク用大型動物ボード、ワーク用ペーパーサートキット、布生地縫製したエプロンシアター用大型縫いぐるみ人形がある。

これらのうち、例えばことわざや早口言葉遊びについては、諸種の小型カード類が市販されている。しかし、これらはどれも高齢者の視覚的特性などに配慮しておらず、本研究が取り組むように、認知症高齢者や幼児を対象とする世代間交流の装置の一つとして活用

できるものではなかった。またペープサートやエプロンシアターについても同じで、市販されているものは大人が子どもに物語を見せるために作られており、能動的な交流を生み出すツールとして考案されたものではない。そのため、絵本交流では、高齢者に見やすい活字の大きさや色、あるいは距離や位置などを探りながら、ボードの制作を行った。ペープサート類についても、例えば上肢の運動が不自由になった認知症高齢者でも園児と協力してペープサート作りができるように、簡便なキットを開発した。

最後に認知症高齢者と幼児の交流では、双方がそれぞれの不便を補い合えるプログラムと教材を開発することが重要である。例えば一部の高齢者は手足に麻痺を抱え、園児の中にはまだ字が読めない幼児がいる。このようなお互いの不便を助け合い、協力し合うプロセス(=仕掛け)を作り出すことに、認知症高齢者と幼児による世代間交流の課題と醍醐味があるように思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

①Takayuki Kawaura, Yasuyuki Sugatani, A Study of older People's Socializing Form with Others: Comparative Analysis of "Living alone" and "Living with a spouse" using Quantification Theory II, Proceedings of KES International Conference on Innovation in Medicine and Healthcare, 2015, 査読有, Volume 45 of the series Smart Innovation, Systems and Technologies, 115-126.

②Takayuki Kawaura, Yasuyuki Sugatani, Clinical nurses' awareness structure of delirium, Journal of Advanced Computational Intelligence and Intelligent Informatics, 2014, 査読有, 18(6), 1013-1019.

③菅谷泰行、老人福祉施設における世代間交流に関する実態調査報告、介護福祉学、2014, 査読有、21(2)、122-129 ページ。

④Yasuyuki Sugatani, Lying, Fantasy and Strategy in Dementia Care, Health Communication, 2013, 査読有, 8(1), 61-69. http://www.healthcommunication.or.kr/main/data/file/journal/634179971_04e38902_kjhc+828129+61-69.pdf

[学会発表] (計 11 件)

①金谷ますみ、菅谷泰行、療法的音楽活動による認知症高齢者と幼児のための世代間交流の試み(第2報)、日本世代間交流学会、2015年10月3日、追手門学院大阪城スクエア(大阪)。

②菅谷泰行、絵本を用いた認知症高齢者と保育園児の世代間交流、日本世代間交流学会、

2015年10月3日、追手門学院大阪城スクエア(大阪)。

③菅谷泰行、高齢者施設介護における世代間交流の効果と可能性、日本介護福祉学会、2015年9月27日、金沢市文化ホール(金沢)。

④Takayuki Kawaura, Yasuyuki Sugatani, A Study of older People's Socializing Form with Others: Comparative Analysis of "Living alone" and "Living with a spouse" using Quantification Theory II, Innovation in Medicine and Healthcare 2015, 12. 09. 2015, Suzaku Campus of Ritsumeikan University (Kyoto).

⑤ Yasuyuki Sugatani, A Dementia Education Project Based on Intergenerational Exchange, Generations United 18th International Conference, 22. 07. 2015, Hawaii convention center (USA).

⑥金谷ますみ、菅谷泰行、畑八重子、桑田直弥、音楽療法を用いた認知症高齢者と幼児のための世代間交流プログラムの試み、日本世代間交流学会、2014年10月4日、姫路商工会議所(姫路)。

⑦菅谷泰行、ドイツの世代間交流プロジェクト、日本世代間交流学会、2014年10月4日、姫路商工会議所(姫路)。

⑧Yasuyuki Sugatani, Beispielhafte Generationen-Projekte in Japan, Deutsch-japanisches Symposium „Demenz und generationsübergreifende Solidarität“, 25. 09. 2014, Kulturzentrum Arnsberg (Germany).

⑨Takayuki Kawaura, Yasuyuki Sugatani, Analysis of Elderly People Psychological Characteristics by Quantification Theory Type II, Czech-Republic and Japan Seminar 2014 (CJS 2014), 17. 09. 2014, Kitakyushu International Conference Center (Kitakyushu).

⑩菅谷泰行、老人福祉施設における高齢者と子どもの世代間交流、日本応用老年学会、2013年11月9日、札幌医科大学(札幌)。

⑪菅谷泰行、老人介護施設における世代間交流の現状と課題、日本介護福祉学会、2013年10月20日、熊本学園大学(熊本)。

[図書] (計 1 件)

① Yasuyuki Sugatani(Hrsg.), Stadt Arnsberg, Begegnungen gestalten Zukunft: Deutsch-japanisches Symposium 2014, 2014, 60.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菅谷 泰行 (SUGATANI, Yasuyuki)

関西医科大学・医学部・准教授

研究者番号：00206393

(2) 研究分担者 無

(3) 連携研究者 無